

「イエス様と私達の間には壁はない」

ご存知のようにイエス・キリストはイスラエルのベツレヘムでお生まれになりました。今月、もし私達がイスラエルに行きまして、クリスマスをお祝いするためにこのベツレヘムに行こうとしますのなら、私達は兵士が立つ検問所を通り、必要ならパスポートの提示をしなければなりません。なぜなら、そこはイスラエルという国の中にあるパレスチナ自治区だからです。最近の情勢により、このベツレヘムでも投石がなされているとニュースは伝えていますゆえに、もしかしたら現在、このベツレヘムに入ることができないかもしれません。すなわちそれは今年のクリスマス、私達はベツレヘムでクリスマスをお祝いすることができないことを意味します。

このベツレヘムという町は聖書のルツ記にでてきます。時は紀元前1100年、外国で二人の息子を失ったナオミというベツレヘムを故郷（ふるさと）とするユダヤ人の女性が、亡き息子の嫁、ユダヤ人にとりまして宿敵である異教の民、モアブ人であるルツを連れて自分の故郷、ベツレヘムに戻ってくるという話です。

かつてナオミは夫と息子たちと共にその地で起きた飢饉のために、ベツレヘムを出て外国にいりますが、帰郷してきた時には愛する家族を全て失い、言葉も文化も違う外国で息子に嫁いだ嫁だけを連れて彼女は帰ってきたのです。「故郷に錦を！」などとは程遠い話で、その時にナオミは彼女を昔から知る故郷の者達に向かい、私を「苦しみ」と呼んでくれといいます。

しかし、神のまなざしは当時の社会では最も弱い立場にありました、この姑と嫁の上に注がれます。ルツははからずもナオミの親戚でありますボアズという男性にベツレヘムで出会い、彼らは結ばれ、ルツは男の子を生まれます。普通ならこの物語は失意のどん底で故郷に帰った者達に神はさいわいを与えたということで終わります。しかし、神はこの一つの点を次の点に結びつけていかれたのです。

どうか心に留めておいてください。このナオミと結ばれたボアズの母は聖書に記録されているラハブでありまして、彼女は異教徒でありイスラエルの敵でありましたカナン人であり、また遊女でありました。またお話しし

ましたようにルツはユダヤ人が最も忌み嫌うモアブ人だったのです。このボアズとルツから生まれた子がオベデで、そのオベデの子がエッサイで、そのエッサイから生まれた八人の子のうち、その末っ子にダビデという男がいます。そう、かつてボアズとルツがベツレヘムに暮らしたように、その後もこの家族はベツレヘムにとどまり続けたのでしょう。ダビデもベツレヘムを出身とし、そこで幼い時から羊を飼う者として育ちます。

ある時、預言者サムエルが神の指示によりエッサイの息子たちの中から初代の王でありましたサウルに継ぐ王を見出そうとし、七人の息子たちがサムエルの前に立ちます。しかし、その中に神の御心にかなった者は一人もいませんでした。サムエルはエッサイに「他に息子はいないのか」と尋ねましたところ、彼の末っ子のダビデはその場におらず野で羊の番をしていたのです。そうです、彼は数にも入らない者でした。しかし、神の御目はこのダビデに注がれており、彼は二代目のイスラエルの王となるべくサムエルから油を注がれるのです。

このダビデは神の前に誠実に生きた偉大な王でありましたが、部下の妻、バテシバと姦淫の罪を犯し、その二人から生まれたソロモンがダビデの後継者となりイスラエルの王となります。そして、その子孫としてイエス・キリストは彼らの約1000年あとに、やはりルツとダビデも住んだベツレヘムで生まれたのです。言うなれば遊女であった者、異教徒であった者、姦淫の結果、生まれた者の家系に連なる者としてイエス・キリストはお生まれになったのです。

ユダヤ人は私達には想像ができないほどに系図を大切にしている人達です。言うまでもなく、その祖先がどんなに偉大であったかというところに彼らの誇りと今を生きる励みとしている民です。そのような中でイエス・キリストはある意味、系図をごまかしてでも隠しておきたい名前の中に身を置くことをよしとしたのです。いいえ、聖書はあえてスポットライトをこのような人間にあてて、イエスはこのような者達の系図の中に生まれたのだと宣言しているのです。

当時のベツレヘムはとても小さな寒村でした。それこそ100世帯にも満たない村だったそうです。そのような寒村の中に身を横たえる宿を見つけ

ることができなかった年若く、何の肩書きもないヨセフと身重のマリヤにあてがわれたのは馬小屋でした。この馬小屋というものを私達はカードや置物で見ることがありますが、実際にはこの馬小屋は自然の洞穴のような場所であったと言われていています。そして、この洞穴は住む場所をもたない羊飼いが野宿するためによく使っていた場所だったようで、現在もベツレヘムに行くと当時の洞穴が残されているのです。イエス・キリストはダビデの約1000年後にそんな洞窟の一つの中でお生まれになったに違いありません。

先にお話しましたように今日のパレスチナ自治区であるベツレヘムに入っていこうというユダヤ人はおりません。ユダヤ人が運転する観光バスすらベツレヘムには入れないのです。あまりにも危険だからです。ユダヤ人としてお生まれになり、我らの王となりましたお方の生誕の地に当のユダヤ人が近づくことができないという皮肉な現状に私達はあるのです。そうです、イエス・キリストは遊女、異教徒、姦淫の結果、生まれた者の家系に連なる者として生まれたにもかかわらず、そこには高い壁があるのです。

そして、それはユダヤ人だけではありません。今日の私達は当時の人達よりも多くの知識を得ています。当時のワイズマンはイエス様を見出すことができましたが、今日のワイズマンはベツレヘムで起きたことを知り得ないのです。忙しく毎日過ごし、色々なことに目移りしながら生きている、多くの問題を抱えている私達にこそイエス・キリストは必要でありますのに、イエス・キリストが諸々の祖先のもとに飼葉おけで生まれたということは、すなわちイエス様と私達の間には壁がないことを意味していますのに、私達の心の壁が高すぎて私達は彼を見ることができないのです。

長い間、この世界は冷戦の時代を送りました。そう、それはイデオロギーの違いからくる問題でした。しかし、あの911以降、私達が抱え続けている問題は民族と宗教の違いからくる問題です。よく言われます。キリスト教徒が民族問題を作り出しているのではないかと。確かにそれは正しいのかもしれませんが。しかし、覚えてください、今日、お話ししましたように、キリスト教徒が信じているキリストは民族の違いを超えたお方であったことを。彼はイスラエルにとりまして宿敵である異教徒の系図の中に身を置くことをよしとされたのですから。ということは、どこに問題がある

のか。そうです、それはキリスト教徒と名乗る私達、人間の側にある問題なのです。私達はこのことを謙虚に受け止め、悔い改めなければなりません。

この一年、皆さんはどんな日々を過ごしましたか。あなたはイエス様の飼葉桶が見えていますか。欲するものが全て与えられておりながら、心の中にむなしい渴きがありませんか。この人のディレクションに従えばいいのだという存在がいますか。あなたとあなたの家族にはここに立つというファンデーションがありますか。新しい一年も自分のこれまでの知恵や経験にだけ寄り頼んでいきますか。どうか覚えてください、私達の経験や知識というものはたかだか数十年の蓄積にすぎないのです。

今日、私達はこれらの全てを変えることができます。きっと人には言えないことを抱えている方もいるかもしれません。私のこの気持ちに何かを語りかけることができる人などいないと思われる方がいるかもしれません。しかし、どうか覚えてください、人類においてイエス・キリストだけが誰を先祖として生まれるかということを決めることができたお方であったということを。彼はその特権が与えられていながらも、愛する伴侶や息子を亡くした未亡人、異邦人、異教徒、遊女、殺人者の末に生まれ、飼葉桶に寝かされた主、私達のために十字架にかかれた主イエス・キリストはあなたの心の思いを知り、あなたにこれからどうあるべきかを示してくださることでしょう。彼こそが私達の土台となるお方です。彼にはあなたの心に届く言葉があるのです。

このようなお方が誕生された日ですから、私達はシーズズ・グリーティングなどとは言えません。それは季節のあいさつではなく、私達の新しい人生の始まりとなりうる日だからです。ですから、私達は天と地に向かって、声高らかにメリークリスマス！と叫ぶのです。お祈りしましょう。